

日本活断層学会 2025 年度秋季学術大会プログラム

11 月 15 日（土）午後

一般研究発表（口頭）

座長：三條竜平

- 13:05 O-1 横ずれ断層の平均変位速度と流域モビリティ指標 PRR の関係性
○山根悠輝・遠田晋次
- 13:25 O-2 分岐断層を含んだ東アナトリア断層帯の準動的地震サイクルシミュレーション
○高橋宗茂・安藤亮輔
- 13:45 O-3 Ulaanbaatar 断層北西部およびその周辺の変動地形学的調査
○岩佐佳哉・中田 高・鈴木康弘・後藤秀昭・
Bayasgalan Amgalan・Narangerel Serdyanjiv

座長：岩佐佳哉

- 14:05 O-4 宮城県鬼首カルデラ南西縁，鬼首断層の活動メカニズムの予察
○三條竜平・須貝俊彦
- 14:25 O-5 四国地方中東部の山地部における綱附森断層の断層露頭
○吉田優駿・石村大輔

休憩（14:45-14:55）

14:55-15:30 ポスター発表ショートオーラル

11月15日（土）午後

一般研究発表（ポスター）

15:30-17:30 コアタイム

- P-1 「活断層ハザード評価のための大学連携人材育成プログラム」の創出と意義
後藤秀昭・○松多信尚・熊原康博・楳原京子・岩佐佳哉・鈴木康弘
- P-2 研究機関と学会の協働による若手育成（その7）：「第7回 活断層の学校 in
つくば」の開催報告
○中埜貴元・吾妻 崇・藤原広行・宮下由香里・山中 蛍
- P-3 折爪断層北部における地下地質構造
○田崎陽平・岡田真介・本多 亮・平松良浩
- P-4 隆起海岸の地形・地質に基づく活構造復元の試み：津軽平野西縁部の例
○近藤梨紗・立石 良・楳原京子・岡田真介・後藤玲奈
- P-5 津軽山地西縁断層帯（南部）を対象とした断層活動性調査
○白濱吉起・レゲット 佳・丸山 正・吾妻 崇・
成田憲文・岸山 碧・亀高正男
- P-6 令和6年能登半島地震を引き起こした海域活断層の直接観察
○濱村康介・立石 良・佐野晋一・澤田 渚・
ロバート ジェンキンズ・鈴木信雄
- P-7 能登半島黒島～鹿磯地区の隆起海岸で認められた湧水の起源について
○松本なゆた・細矢卓志・石原隆仙・寺田龍矢・後藤 慧
- P-8 能登半島北部沿岸吉浦周辺の低位段丘における GPR を用いた地下構造の推定
と OSL 年代測定
○赤井 東・安藤亮輔・宍倉正展・田村 亨・
伊藤一充・安江健一・橋下怜旺
- P-9 能登金剛・巖門における生物遺骸群集の発見とその意義
○後藤玲奈・立石 良・近藤梨紗・安江健一
- P-10 飛騨川河床に現れた阿寺断層露頭の変遷
○細矢卓志・後藤 慧・寺田龍矢・安江健一
- P-11 阿寺断層帯中部のステップ部における断層の変位と活動時期に関する研究
○廣瀬健大朗・安江健一・石山達也・廣内大助
- P-12 クリプトテフラ研究の発展と変動地形学・古地震学的研究への応用
渡辺 樹

- P-13 上野盆地に分布する大野木断層の変動地形と活動開始時期
○原西絢太・後藤秀昭
- P-14 別府湾周辺から由布院盆地における断層変位地形の詳細な分布と特徴
○岩佐佳哉・熊原康博
- P-15 八代海の海底活断層の分布・形状に関する再検討
○楮原京子・後藤秀昭
- P-16 台湾東部花東縦谷断層における自然露頭に基づく完新世活動履歴
○太田 麗・顔一勤・顔君毅・陳土豪・松多信尚・
石山達也・廣内大助・杉戸信彦・福永拓真
- P-17 衛星画像の解析による 2025 年ミャンマー地震 (Mw 7.8) の地震断層の変位量
分布

堤 浩之

11月16日（日）午前

一般研究発表（口頭）

座長：白濱吉起

9:20 O-6 布田川断層帯宇土半島北岸区間の活動履歴

○大上隆史・多良賢二・一井直宏・細矢卓志・後藤 慧

9:40 O-7 高分解能三次元音波探査（3D-HRS）データを用いた変動地形学的検討
－別府湾に分布する海底活断層の完新世活動履歴－

○高橋恭平・川崎慎治・原 彰男

座長：大上隆史

10:00 O-8 WebGIS を活用した活断層地形の発見とその可能性

○石村大輔・岩佐佳哉・吉田優駿・渡辺 樹・辻 智樹

10:20 O-9 地表地震断層による常時微動特性の変化について

○香川敬生・野口竜也・西本壮汰

10:40-10:50 企業展示紹介

10:50-11:20 表彰式

昼 食

(12:00-13:00 キャリア懇談会)

11月16日（日）午後

シンポジウム
「地形・地質の編年・年代学の最前線
―大地が動いた“その時”に迫る―」

【趣旨】

活断層研究において、地形・地質の編年・年代決定は重要な課題です。本会場である東京都立大学は古くから日本の火山灰編年をリードし、その情報は活断層研究にとっても有用です。近年では放射性炭素年代に加えて、様々な編年・年代手法が発展を遂げ、その精度や確度が向上しています。一方で、分野の細分化とともに、編年・年代学と地形・地質学の研究者のコミュニケーションがとれる場は限られており、各手法の長短所や適応例を知る機会は少ないです。そこで、本シンポジウムでは、近年の編年・年代学をリードする研究者が一堂に会し、最新の情報を提供するとともに活断層研究への適用・応用について議論します。

13:20 趣旨説明

石村大輔（千葉大学）

13:30 S-1 地質学的な時間解像度はどこまで高められるか？
―放射性炭素年代研究の現状と限界性能への挑戦―

大森貴之（東京大学）

13:55 S-2 宇宙線増加イベントとスパイクマッチング

三宅美沙（名古屋大学）

14:20 S-3 火山灰編年学に関する最近の動向
―層序・年代から検出・分析手法に関して―

鈴木毅彦（東京都立大学）

（休憩 15 分）

15:00 S-4 変動地形と古地震研究への光ルミネセンス年代測定の利用

田村 亨（産業技術総合研究所）

15:25 S-5 宇宙線生成核種 Be-10 による断層変位段丘面の編年

金田平太郎（中央大学）・松四雄騎（京都大学）

15:50 S-6 熱年代法を用いた断層運動と山地形成の関係に関する研究

末岡 茂（日本原子力研究開発機構）

16:15-16:45 総合討論

（終了 16:45）